春雷 II

春雷 II

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19495112

R-18, エク霊, 守エク霊, モブ霊, 霊幻総受け

無自覚で書いちゃったシリーズ二話目です。
争奪戦どうなるの…

エク霊からモブ霊になります。
着衣エロ、超能力エロやってます。

2023年６月公式展示会のキャラコスをそのまま引用して書いてみました。
モブが社会人設定なので2337くらいの年齢捏造ですかね。
攻めフ●ラあるのでご注意下さい！

春雷 II

夕暮れ時の相談所。
ガタン、と音がして事務机が軋む。積み上げられていた書類はバサバサと羽根のように床に舞い散り、ブックエンドで固定されていた書籍がゴトリと揺れて、こちらも派手な音を立てて床に身投げする。
強引に肩を掴まれて、金属で造作された机上に背中をギシリと押しつけられる。抵抗出来ないように手首を縫い止められて、霊幻は驚いて組み敷いてきた真上の顔を見る。
「その時計・・・誰から貰ったんですか」
怒りを滲ませて唸るように囁く茂夫。白のワイシャツにチャコールグレーのスリーピースを合わせ、緑地に赤の細線がアクセントカラーとして配色されたネクタイを締めている。橙の夕陽が逆光となってその顔はどす黒い影を落とし、目だけが爛々とギラついている。
彼は大学を卒業して、新社会人への第一歩を踏み出した、若さと希望と輝く未来溢れる黒髪の美しい青年へと成長していた。そんな彼が普段着とは異なる装いをして、霊幻を見下ろしている。
「アンタも久々に張り切ってたってわかってます。でもだからってこんなの目の毒だ」
茂夫は苦しげに顔を歪ませて言う。そのまま霊幻の身体を超能力で縫いつけ、彼の頬にそっと手を触れた。
「なんで僕を見てくれないんですか」
頬に触れた指は淡い力で顎、首筋と辿り、首元をきゅっと彩る白のワイシャツの襟と紺のネクタイを撫でて、結び目をしゅるりと解く。光沢のある少し硬めの布地が指先をくすぐって、織り目を介して霊幻の体温をぬるく伝えてくる。
「その時計、誰から貰ったんですか」
また落とされる質問の言葉。
「・・・・・・」

答えの出ない白い喉。冷や汗と、ごくりと固唾を呑む緊張感が、その場の空気を支配する。

前夜。霊幻の自室。明かりを落とした深夜1時過ぎ。
おもむろに突き出される、金の時計。部屋に入り込む月明かりに反射して煌めいて、霊幻の瞳を突き刺す。
「これを茂夫の前でつけろ」
裸の胸にジャラリと落とされるひやりとした金属特有の質感に、ぞくりと震えが湧き起こって肌が泡立つ。
嫌だと弱々しく被りを振れば、突き出された手の主人がニヤリと薄気味悪く笑って、金時計を摘んでそのまま肌を辿るように滑らせる。時計のなぞる素肌が乳色にぼんやりと闇に浮かんで、冷たさとつるりとした感触にふるふるとわなないた。
「嫌なら俺様と勝負しろ」
耐えられたら、未装着を許す、と。
それも嫌だと泣いて抵抗するのに、無骨な手は腿を大きく割開いて。
「んッ・・・！」
陰茎に与えられる甘やかな感触。ぢゅる、とわざとらしく音を立てて熱い舌に追い立てられる赤みがかった先端。頭髪よりも色味を落とした茂みに指を緩く遊ばせながら、内股に指を這わせて、背筋を競り上がるような鋭い痺れを重ねていく。とっくに慣れてしまったはずのその感触が、この夜に限って痛いくらいに霊幻を嬲る。
拒絶の言葉を吐きながら荒ぶる息を必死で殺して、それでも乱れていく身体を抑えることができずに腰を捩る。眉を歪ませて涙で霞む視界を巡らせれば、陰茎に齧り付いて離さない黒髪が股ぐらで揺れて、三白眼が怪しく緑に光って、まるで愉快と細まるのだった。
「やめ、ろッ」
細い指でその黒を手綱のように掴めば抵抗になると思った。でもそれは認識の誤りだったと悟る。指に絡めた途端に与えられる刺激は増して、強く吸い上げられた。
「あぁっ・・・！」

辛うじて耐え抜いたそれをいなすように指先に力を込めれば、抱き抱えるかのようにひしとしがみついて、どうにも逃すことの出来ない感触にただひたすら啼く。

嫌だと言うのに、身体は裏腹なものだな。

集中的に責め上げられて、先端を這う舌がぞりぞりと感じられて、吐き出す愛液も声も全てが止められなくなっていく。
「だ、め、っ」
止まらない。止まらない。止まらない。
まるで自分があの子供に寄せる、重くべったりとドロついた想いのように。
それは常にそこにあって。
常に自分を舐り続けて。

弾けさせたら、終わりだ。

「あぁぁ！」

涙を散らしながら仰け反って、抱き締められていた狭い粘膜と舌の中にぶち撒ける。
エクボの鼻腔には青い香りと、舌にはぬるついた液体が派手に吐き出された。

敗北した。
結果は、実にあっさりと出てしまう。

目の前にぶら下がる時計。
カチ、カチと小さく無機質な音を立ててそれが刻むのは、霊幻のやるせない記憶と想いで満たされ苛まれた年月。
目に焼き付けられるその黄金が、全てをかたく冷たく、重く、なにものにも溶かされないように押し固めていく。
この気持ちすら、冷たく。

深い深い水の底へ、闇の底へ、沈めていく。

裸の左腕に月色に煌めく手枷がカチリと、エクボから装着された。

「なんで答えないんですか」
イラつく黒髪の美丈夫が、涙を湛えて震える声で囁く。
「なんで、エクボなんですか」
霊幻の頬にぽたりと落ちる、温い雫。
茂夫にはわかる。その腕時計が纏うのは、悪霊の禍々しいまでの濃い緑の霊気だ。
そして霊幻に巣食う緑色。まとわりつくように魂を覆って、茂夫にバチバチと威嚇する烈しい執着の塊がはっきりと見える。

触るな。
触れようものなら、覚悟しろ。

・・・誰に向かって、言っているんだ？

「ぐっ？！」
がちりと見えない力で押さえられて、身動きが取れない。そして同時に全身を弄る透明な何か。
それは明らかに、昔禁止した行為。
禁止された行為。
やめろと叫ぶ霊幻を他所にそれはスラックスの上からそろりと這って、同時に物理を無視して入り込み、直に陰茎を撫で付けてくる。
訳がわからなくなって混乱しながら拒絶の言葉を散らかして、止め

るように喚く。それでも止まらないのは、前夜のあの時と同じだ。
そして、エクボを受け入れてきた門にもその力が及んで、無遠慮にするりと侵入されて、中でぶわっと空気を含んだように膨らんだ。
「はぁ！ああッー！」
予測し得なかった膨張感と、それに伴う圧迫感。息が詰まる。呼吸が辛い。思わず身体がぐっと力む。
苦しげに顔を歪ませて目を向けてくる霊幻に、茂夫は頬を伝う涙をそのままにじっと視線を絡めた。
「あんただけが苦しいとでも思ってるのか」
「やめ、っ」

覚悟しろだって？
なら、触れずに侵すまでだろう。
甘いよ、エクボ。

あの春の日。
桜の下ではにかみながら、多分一生分の勇気を振り絞って伝えたのだ。
幻想的な薄紅色の舞い散る穏やかな風の中で、心臓が飛び出そうな緊張感を必死に隠しながら、やっと伝えられると勇んで晒した、精一杯の恋心。
不器用で荒削りで、なんと言ったらいいか分からなかったその言葉を寄せ集めて、差し出したつもりだった。
だが、それはあっさりと握り潰された。

だめだ。お前に俺はもう、必要ない。

だから去れ。
旅立ちの時だ。
その胸いっぱいの輝く未来を信じて、どうか手放すな。

俺などに、構うな。

あの時に全身を包み込んだ、むせかえるような桜の香りを忘れない。
あれ以来、桜が苦手になってしまった。
あなたのせいで。

伝わる伝わらない以前の問題で、このような「深く繋がる」関係そのものを、否定するんだ、この人は。
いとも簡単に、くしゃりと、大人という免罪符を使ってあられも無くなるまですり潰して、それを念を押すようにわざわざ確認して破棄するのだ。
いつも。
いつもいつも。
いつもいつもいつも。

その言葉で救われたたくさんの人々に囲まれているのに。
なぜ自分を幸せにしようとしないの？

僕にはわかる。
あなたの、弱さが。

「ァッやめ、やめろ、あっ！」
紺のネクタイだけが解かれた装い。それ以外は一糸乱れぬまま、霊幻ががくがくと悶える。身体の自由が効かない今、されるがままに見えない何かに弄られて、犯される。
喉元をぴしりと戒める襟には、しっとりと吹き出した汗が染みる。それも柑橘の香水と交わって、甘い汗の香りとなってふわりと匂い立つ。
「やめろぉッ！」
泣き声が、二人だけの所内に響く。止まらないまとわりつく感触が、着衣の中で暴れ回って。
「ッ！」

体内の膨らみを潰されて、敏感な先端を捩じ込むように刺激されて、脳髄を火花が烈しく散っていった。
「ぁあーッあああ！」
ガクガクと身体を痙攣させて、眉根を寄せて、叩きつけられる波に攫われていく。抵抗の術など最初から無く、流すことも出来なかった。泣きたくなるような痛みにも似た刺激を全て受け入れさせられたのは、きっと罪であり罰なのではないかと、乱れる思考の中でぼんやりと浮かんでは消える。
吐精でじんわりと青黒く染みて変色する、スラックスの前開き。中は動けばぐちゃりと音を立てて、否が応でも絶頂してしまったことを知らせてきた。

「・・・参ったな」
忌々しい。
その手に相変わらず光るのは、あの悪霊の濃い霊気を纏った金時計。
勝ち誇ったようにギラギラとその手首に嵌められた黄金色の手枷は、茂夫にどうしようもない苛つきと悔しさをぶつけてくる。
顔を背けて力無く横たわる霊幻に、そっと唇を寄せて耳元で囁く。
「ごめんなさい」
吐息を感じる大人しめの声は、春の青苦い思い出からまた低さを増して、重く霊幻の鼓膜を叩く。

「でも、好きです」

それだけ言って、茂夫が事務所を出ていく。
バタン、とドアが閉まる音がした。
身体は自由を取り戻し、解放された。だが、身に施された諸々は無かったことになど出来ないように、爪痕を本人にわかるように隠して、残している。
力の入らない脚。解かれたネクタイ。下半身の違和感。

左手首に纏わりつく、ピリピリとした、執着。

「なんで、俺なんだよ・・・！」

がらがらと灰色の雲が光って、雷が落ちる。
急に降り出した強い雨。
さっきまでの晴れ間はどこへ行ったのか。

なぜ、こうなったんだろうか。
机の上で、霊幻はそのまま、ぼろぼろと泣いた。